

き問題なりと羨望してゐたもの、ナ氏は其多額の収入を棄て、奉朝したのは、全く日本人教育に趣味を有つて自らの希望より出でたるに由るとのこと。

△他の一人の新任外人教師を獨逸人ルイス・ヒュンゴフ・フランク氏とする。髪も黒く眼も日本人に近い。奈翁に似た所がある、そして誰かの評語を借りて小さな聲で云へばゴマの根を加味してゐる。

△渡邊校長が躍起となつてゐる高商の教科の顧問として、同科の命運を明拓し算價を發揮すべき重大なる期待を背負つて立つ。講義は英語であるさうだが聴取困難いとの評判だ。「スミレハ、デス、ムラサキ」など、文法錯誤の日本語を操る。

△伯林大學を得易からぬ「優等」の名譽を以て卒業し、其結果博士號を得て同校の教官たりし人、篤學な學者で何時も實驗室で熱心に研究してゐると云ふ。夫人はまだうち若い倫敦の美人だ。

△今年度の學費で更に一名或は二名の外人教師を購得する事になるさうだ。支那語の爲の支那人か、會話の爲め英人かと思はれてゐるが、まだ發表の期に達しない。學校當局者の言。

△一休外人教師は、之を邦人教官に比し



＜師教人外の商高小＞  
氏クンラフ人獨 氏アロイテ人英 氏トーフ人獨

て俸給の法外に高いだけの利益が直接に學生に廻りうるものぢやない。極言すれば床の間の掛軸であり、置物である、座敷を調へる爲には氣くつて済まぬけれども結局贅品である。

△現在の三外人教師を併べると、一ヶ年一万五千圓の代物である。が邦人教官をら、同じ俸給で第一流の學者を少くとも

五六人一人一人を以てしても講義の效果は遙に々々大なるべき一を難致するに、尤も外人教師は高等出稼だから云つて了へば其迄だ。遺憾

五月二七日の行状

●小川博士の來樽 小樽高等商業學校にて財政學講演の爲め來樽の豫定なりし京都帝大法科教授法學博士小川郷太郎氏は二十五日着樽キト旅館に投宿せしが約二週間滞在の筈



續高商 評判記

△會て一度紹介せる教官は重ねて茲に引張り出す事をせぬ積りだつた。けれども配らずに止み難き一人がある。今は獨逸ボン大學のリーチエール教授に就て經濟學の研究を續けてゐる教授商學士大西猪之介氏これ。

△年齒最も少くして最も早く小樽高商より留學した事實だけでも何等か非凡な所が無くしてはならぬ。ツエニス商人でペラリオがボージャを推薦して云つてゐる如く「さばかり年若き人にしてさばかり老成せる頭を有せる人、余嘗て知らず。△氏を知るに深き一博士は「山口、長崎取るに足らず、たゞ小樽は一大西あるに依りて重んず」とまで激賞した。△小樽高商生は氏に於て判教の泉を見出した、常に何等かの生氣を吹込れてゐた。△三年の留學を終へて歸校するのは、今の一年生が最う卒業しようとする間際である。然し其の經濟學の講義を聴く爲

に落第して待つて居るにも決して後悔する事はあるまい。——と信する。

△開校記念日の「新しい気分」も、辯論部例會に於りし熱辯も、留學遊別會席上の別れの辭も、皆、旁ら人なきが若く何物にも累せられざる卓落奔放の氣が漲つてゐた。爾る、物を斬らざれば止まない。

△或は曰ふ「吾々は現代を超越せざる可らず、然れども之を超越するの途は過去を振り返る事にもあらず、勝手なる空想を作出す事にもあらず、實に新しい氣分（パイオニア）のスピリットといふ意味に於て）を以て現代に處するにあり。△或は論ず「古き道徳を古き時代に判斷するは可なり、古き道徳を新しき時代に持來れる場合、古き時代の思想にて判斷すべきか、新しき時代の思想にて判斷すべきかは之れ大なる問題なり、古きを以てての健全思想よりは果して眞の健全思想なりや否や。」

△或は嘲つ「願れば余が過去は餘裕なき學問一途の生涯なりき、今にして人生のさまで焦燥する必要なきや成せり。人生には須らく低徊趣味あるべし、刺身はツマもあつてこそ刺身なれ。△學術雜誌に關し論文の發表ある事は小樽高商の名を重からしむるに足る。高商

生が政治論をするなど、はと帝大遊りて憤慨やら嫉視やらをした「帝國主義論」の如き其の専攻前時代の著である。

△昨年、國家學會雜誌に「財の研究」が載せられた時、理路透徹した獨自の所論に對し陰に其の將來を驚嘆した學者も少くなかつた。而も其は學校で講義してゐる經濟學論の中の一著に過ぎなかつた。

△今年四月ヶ月連続して國民經濟雜誌に「囚はれたる經濟學」が發表された。其の最後「放たれたる經濟學」の一節に余が再び本誌の讀者に見ゆるは三年の後の「べし」と公約してある。留學の最大目的が、經濟學を論理より、豫言より、政治より解放せんとするにあるを窺知し得る。△いつか岡本利吉と稱ぶ人の「社會將來の樂觀」てふ著書が「時代の名著」と銘打つてあるを繼に讀へたと見れば、同誌上に隨分手酷き皮肉——それは眞面目な意味で新しい人の一特權であるが——を以て批評を加へ杜撰を指摘した。

△第三者に於ては痛快に相違ないが著者こそ可哀さう「他人の説を採納して之を理解した人が大思想家で其他に大思想家がないものとするならば、著者は大思想家以外の絶へある」と完膚がない、とめを刺し過ぎた。

△實はアンナ著書に對し氏の力を用ふるまじも無かつたのだ。天晴名たる公達が無兵封武者を手を掛けたやうなもので餘り手柄映ひもしない。

△既、與へられた紙面を起つた多くを言ふ餘地がなくなつた。そこで氏の學者的眞價をアプレシエイトしたい人には、茲に説くよりも氏の今後發表せらるべき論文、著書から直接に言はした方が賢いやうである。

△學校での講義も、結局は氏の自ら輸入たりし如く世尊の投じた捻筆であつた。恐らく「衆皆寂然」の側らしい、破顔微笑した迦葉の果して有りや無しや。

△終りに、氏が最近消息の私信から其一節を洩して置く——「西洋は確に思つたよりよろし、日本はとて／＼驕自なりあらゆる意味に於て後進國なり五百年経れて居る、せし／＼變らなげあ風目な



授教商高西大

り、過去のカビくさい臭ひを蕩ふなでは、以ての外的事なり——苟くも鎮壓せぬ限り、(復讐)